

# 上司小剣 作家以前の小品「その日く」

荒井 真理亜

一

上司小剣の没後、正宗白鳥がその追悼文「小剣氏について」(『読売新聞』昭和22年9月8日)の中で、「氏は、読売のお抱へであつた紅葉山人を知つてゐた訳だが、山人の門下となつて世に出ようとはしなかつた。学閥に関係なく、文壇のどういふ仲間にも入らうともしなかつた。自分だけの力で文壇に出て、自分の力相当の地歩を占めるやうになつたのだ」と回想している。

のちに上司小剣自身が、「私が真に文壇に出たのはわりあひおそく、後藤宙外氏の紹介で、『新小説』に処女作『神主』を出した」(『処女作時代』『女性』大正13年6月1日 第5巻第6号)と述べているように、上司小剣は、明治四十一年八月一日、『新小説』に掲載された「神主」によって、文壇に登場した。

しかし、上司小剣は「神主」をして小説家として認められる以前に、既に文壇の一部の人に注目されていた。大町桂月が「文芸時評 放言六十六則」(『太陽』明治38年6月1日 第11巻第8号)の中で、次のように述べている。

冗漫といふとは、今の操觚者の通弊也。△中略▽余は、雄大の文字を愛し、かねて、簡勁の文字を愛す。長短あわせ得たりしは、樗牛也。小品にすぐれたるは、緑雨と小剣と也。

大町は、当時文壇においてまだ無名であつた上司小剣を「小品にすぐれたる」として、斎藤緑雨と同列にその名をあ

げた。上司小剣は、明治四十一年に「神主」で小説家として文壇で認められる、それ以前に、明治三十八年、すなわち三年前にも、大町桂月によって注目されていたのである。

では、大町のいうその「小品」とは、一体どういうものであったのだろうか。

上司小剣の自筆年譜によると、明治三十年一月、堺利彦に勧められて東京に上り、同年三月、読売新聞社会部長堀紫山の紹介をもって読売新聞社に入る。この時、上司小剣二十四歳。その後、明治四十年まで、社会部の編集主任となり、論説記者を兼ねていた。そして、付け加えておこならば、上司小剣は記者時代に、上司子介の署名で明治三十二年一月四日発行の『相撲新書』の編集を担当し、明治三十三年五月二十六日には『相撲と芝居』日用百科全書第四拾三篇』を山岸荷葉との共著という形で、ともに博文館から出版している。

この頃の事を、正宗白鳥が「旧友追憶記 花袋泡鳴秋聲秋江小剣」(『新生』昭和23年1月1日 第3巻第1号)で、私の入社した頃、小剣は年二度の大相撲の記事を扱ってゐた。当時の「文化欄」であつた一面の編集をしてゐた。それから、『その日その日』といふ題で、毎日二三行の警句らしいもの、ユーモラスなものなどを書いてゐた。

と述べている。白鳥が読売新聞社に入社したのは、明治三十六年六月のことであり、当時、上司小剣は相撲記事や簡単な感想やコラムを書き、『読売新聞』を中心に活動していた。それらの仕事の一つに「その日く」がある。『相撲新書』と『相撲と芝居』日用百科全書第四拾三篇』の二冊は、啓蒙書であるから、大町の言った「小品」とはこの「その日く」をさすと見てよいであろう。したがって、上司小剣は「神主」で小説家として文壇に登場する以前に、『読売新聞』に連載された「その日く」という小品によって、既に文壇の一部の人に注目されていたのである。

## 二

では、大町桂月の目に留まった、上司小剣の「その日く」とは、どのような小品であつたのだろうか。

「その日く」の発表に関して、紅野敏郎が、「上司小剣―『簡易生活』前後―」（武蔵野ペン）昭和37年12月1日第7号）で、次のように述べている。

『小剣その日く』は、文字通りその日その日、明治三五年の中頃から三八年の中頃までの読売新聞に書きたためていったエッセイ集である。

在来の多くの年譜も、紅野の記述をそのまま踏襲しているようである。しかし、明治三十五年には、『読売新聞』に「その日く」は掲載されていない。『読売新聞』において、「その日く」の掲載が始まったのは、明治三十六年一月二十七日からである。

では何故、このような間違いが起こったのか。

「その日く」が単行本となった時、上司小剣がその「序」で、「その日く」の発表について次のように書いている。

明治三五年頃から、明治三八年の中頃までの読売新聞に、毎日一つづつ書いたのを集めて、この本は出来た（後略）

上司小剣自身が、その掲載開始時期を「明治三五年頃」と間違って記したのである。おそらく在来の年譜作成者らは、「その日く」の初出を確認せずに上司小剣の間違いをそのまま踏襲したものと思われる。

つまり、「その日く」は、明治三十六年一月二十七日から明治三十八年十二月十四日まで、『読売新聞』に掲載された。その掲載回数は、全七百八十四回である。

「その日く」は、上司小剣を中心に、剣菱（正宗白鳥）、松軒（川口松軒）、孤瓢（前橋孤瓢）らも加わり、分担執筆している。また、「その日く」は毎日必ずというわけではなく、紙面の状況に応じて掲載されたりされなかったりした。「その日く」が掲載された七百八十四回の内、小剣によるものと確認出来たのは六百十六回分で、全体の約四

分の三を占めている。

小剣は、のちに自らが執筆した「その日く」を、単行本として、明治三十八年九月五日に、読売新聞日就社より刊行した。単行本『小剣その日く』には、明治三十六年一月二十七日から三十八年八月二十三日までに発表した分を取捨選択して三百五十一篇を収録している。

『読売新聞』に掲載された「その日く」、七百八十四回分の掲載日、執筆者名、英訳の有無、掲載面、そして単行本収録を一覧表にし、【注】にあげておく。

「その日く」の署名についてであるが、「その日く」が『読売新聞』紙上に初めて登場した明治三十六年一月二十七日には、「小星」という名前であった。「小星」は、上司が「小剣」という署名を用いる前に使っていた名前である。「その日く」の掲載中に上司は、「小星」から「小剣」に筆名を変えるのだが、上司小剣が、署名を変えた理由については、「文壇諸名家雅号の由来」(『中学世界』明治41年11月20日 第11巻第15号)に詳しい。それには、次のようにある。

五六年前、『読売新聞』に初めて論説を書いた時、主筆が社説と区別する為めに、何んとか署名して呉れと云はれましたから、取り敢へず『小星』(小生のつもりで)と書いて、爾来小星の名で二三回紙上に出しましたが、或る日、小生の論説で組み上つて、工場へ廻らうとする時、編集局内の漢学先生が、小星とは妾の異名だと教へて呉れましたので、急に厭やにつて、咄嗟の考へで、星の字を剣の字に代へて『小剣』としたのが、私の雅号の始である。〈後略〉

先にあげた正宗白鳥の「旧友追憶記 花袋泡鳴秋声江小剣」によると、上司小剣は「その日く」執筆当時に『文化欄』であつた一面の編輯をしてゐた。「その日く」は、明治三十八年十月までは基本的には第一面に掲載された。したがつて、「その日く」の主たる担い手が上司小剣であつても不思議ではない。

また、「その日く」の題名についても、明治三十八年十月三十一日付の「その日く」で、上司小剣は、次のように述べている。

『その日その日』といふ名ハ、『梅にしたがひ、柳になびきその日の風次第』とかいふ江戸唄から出たのか、或ハ「二日の事ハ一日にて足れり云々」といふ聖書の文句から出たのか、といふことを問ふて来た人があるが、『その日その日』といふ名ハ、別に出所の何も無く、デタラ目につけたのである。昔から古実家などといふ物識りハ、これに似たつまらん穿鑿ばかりやつてゐるのであらう。

「その日く」という題名を深読みした古実家が出たことをおもしろおかしく書いているのだが、上司小剣自身が『その日その日』といふ名ハ、別に出所の何も無く、デタラ目につけたのである」と明言している。この一篇から「その日その日」は上司小剣が命名し、同じ頃『読売新聞』で好評を博していた「はがき集」欄と同様に、上司小剣の発案によるものと断定してもよいであらう。

単行本『小剣その日く』は、紙装仮綴の菊半載の小型本である。巻頭に、上司小剣自身による「序」と「いしまろにわれものまをすなつやせによしとふものぞむなぎとりめせ」という大伴家持の歌が付されている。その次に、目次が五頁、大町桂月による時評が載せられ、本文が一五三頁と続く。一篇一篇に、新聞初出にはなかった番号と題が付られ、全三百五十一篇が収録された。

単行本『小剣その日く』に収録されたものは、上司小剣の執筆による六百十六回分の内、三百五十二回分であった。三百五十二回分といっても、単行本の(一一五)の「着物の裏」は、初出の『読売新聞』には、明治三十六年十二月九日と三十八年一月二十六日に同一の文章が掲載されている。また、(三二二)の「梅雨」も同様に三十七年六月七日と、三十八年六月八日に掲載されていた。そして、単行本において、初出が不明なものが一篇ある。それは、(三二五)の「夕涼み」である。これは、紙上に掲載されなかったもので、上司小剣が単行本収録の際に書き加えたのであらう。

また、単行本の収録は新聞発表順ではない。例えば、単行本の一番最初に収録されている(一)の「真鯉絆鯉」は、明治三十八年七月二十日に掲載された、つまり、『小剣その日く』が刊行される直前に発表されたものを一番始めに持ってきているのである。

初出の「その日く」に掲載された時には無署名だったものが二十回あって、その内、単行本に収録されているものが、明治三十六年二月三日分と同年三月一日分の二篇である。したがって、これらは上司小剣によるものと断定してよい。

次に、短文ではあるが、管見に入った『小剣その日く』の書評をあげておくと、潮(林田春潮)が「新刊紹介」(『都新聞』明治38年9月15日)に次のように記した。

著者は太陽の時文記者をして「小品に勝れたるは緑雨と小剣也」との賛辞を作らしめたるの人、内容は其日くくに感得したる所を簡勁にして且つ平明なる筆を以て随筆体に記述したるものにして形は無韻の詩、質は箴言、人生に對して趣味と教訓とを同時に与ふる所洵に当代得易からざる小品の才と云ふべし

また、無署名ではあるが「新刊紹介」(『電報新聞』明治38年9月19日)には、次のようにある。

上司小剣の短文は、筆致の軽快と、觀察の清新と、取材の多方面とを以つて優つて居る、而して其の意見の進歩的であるのは殊に喜ばしい、唯数年に亘つて、その日くくの随感を書いたものであるから、斯うして一冊の本に集めると思想の統一を欠いて見えるのは、已むを得ないであらうが、欠点と云へば欠点である、著者も之を認め居て、もとくく無韻の詩のつもりだから、読む人に少しでも趣味を与ふれば満足すると云つて居る、これからの夜長のつれくには、読んで肩もはらず、腹にもたまらず、よき読物である

更に、『松』による「新刊批評」(『萬朝報』明治38年9月28日)は、次のように書かれている。

読売新聞で書きためたその日くくの随感を一木とせしもの、著者はみづから無韻の詩といふて居る、詩として見

るべき程の趣味の有無は驟かに判断しがたいが中々奇警な洞察もあり思ひ切つた鋭利な批判もある、併し中には余り世間が見えず、是程の眼光をもつて居ながら何故あんな事が分らぬかと気の毒な感じのする事が無いでもない、が、此処が今日の文士なるものゝ通弊であるから此人のみを責めるは無理かも知れぬ

無署名ではあるが、「新刊紹介」(『太陽』明治38年10月1日 第11巻第13号)には、次のように記されている。

小剣子独特の随筆也。△中略▽文章に厭味なく、すらくとして面白く、且つ其の趣は、洵に穩かにして、而も急所を衝くものあり。故縁雨の筆の如く、毒づく所もなく、また無闇に慷慨罵詈する所もなく、温雅にして奇警なるは此の特色なり。殊に美しき家庭的思想の現れたるは、他に覚めがたき長所ならむ。

同じく無署名であるが、「新刊紹介」(『新声』明治38年10月1日 第13編第4号)には、次のようにある。

読売新聞に於て、趣味のあるものを数ふれば、まづ吾人は小剣氏の「その日く」に指を屈するを至当なりとす、「その日く」は三年の昔より、本日に至るまで常に日々の紙上を飾りて、単言隻句のうちによく諷しよく誠め、よく教へ、よく楽しましむ。現下文壇冗漫の文字をなすもの多し、しかも簡勁此の如きを見る稀なり、吾人は雄大なる文学を共に、此の趣味ある小品を娛むを喜ぶ、本書は既往三四年のその日くの小品を集めたるもの、読者、寧ろ此の短かき文字が如何に読売紙上に重きをなせるかを、実際に試みるとせば、つきて一本を味へよ。

これも無署名のものだが、「新刊紹介」(『家庭雑誌』明治38年10月2日)においても、次の如く評された。

中にも皮肉なものもあり、可愛いものもあり、滑稽なものもあり、通篇、兎に角小剣君の独壇の妙味が味はれるのである。

そして、『慶』による「新刊紹介」(『無我の愛』明治38年10月25日 第10号)には、次のようにある。

曾て読売新聞に連載された、氏の小人生観、小社会観と云ふべき短文を、よせ集めたもの。自序に云ふてある通り、確に無韻の詩で、紅も白粉もつけぬ、飾り気のない所に却て多くの趣味が認められる。

また、無署名だが、「新刊雑著」（『大阪毎日新聞』明治38年12月14日）にも次のような紹介文が載せられた。

読売新聞紙上に於て数年間ものされたる小劍子の即日即時の隨筆三百五十余篇短きは半行長きも十二三行を超えず例せば「孔雀の尾で蓑をこしらへて着て見たい」「夢と病氣とが無かつたら人生の趣味は半減するのであらう」「監獄が学校になる時まで生きて居たいと思ふ」の類にて理屈は言はず唯だ直覺したそのまゝを端的にかいたものあつばれ自分では言ひ得たやうなものが平凡他奇なきものとなるもあれど奇詭人心の機微を穿つもの多しおもしろき小冊子なり

これらの書評では、おおむね好評であり、その内容についても論及して、上司小劍のコラムニストとしての獨性を認めている。また、上司小劍のちに出版した同じ小品集の『金魚のうろこ』（大正5年2月20日 東雲堂書店）の「序文」に、「其の本（注、『小劍その日くく』をさす）何したはづみか、可なり売れて、私の本には珍らしく、七版までを重ねた」というから、上司小劍は、「神主」で小説家として注目される以前に、「その日くく」で「一般に好評を得」て、多くの読者を獲得していた。つまり、上司小劍の小品は早くから大町桂月によって注目されていただけでなく、一般にも高く評価されていたのである。

### 三

上司小劍の小品「その日くく」の第一の特徴は、あくまでも、『読売新聞』の△紙面の埋め草▽として、執筆されたことである。「その日くく」は、新聞の紙面の編集の都合により、紙面に余白が出来た時、その余白を埋めるために執筆されたのである。

その日、その日の編集の状況によって、紙面に余白があるか、余白の字数が何字分であるかは、あらかじめ決まっていなかった。したがって、前もって書くべき素材を準備して執筆するというのではなく、「その日くく」は、まさに、そ

の日、その日の紙面の編集後の短時間で、しかもその余白の字数に合わせて、即興的に執筆せねばならなかったのである。そのため、先に述べた単行本の「着物の裏」や「梅雨」ように、同じ文章を一年後に再び掲載するようなことにもなったのであろう。

実際に、「その日く」は一篇一篇が非常に短く、しかも、長いもので二十行、一番短いもので一行、すなわち四百字から二十字ほどと、その字数も日によってまちまちであった。また、毎日必ず連載されたわけではない。すなわち、一定の字数や枚数、あるいは掲載曜日を決めて、「その日く」欄が設定されたのではない。新聞記事が多く、紙面に余裕がないときには執筆されなかったのである。

もう一つ「その日く」の特徴としてあげられるのは、明治三十六年四月二十五日から三十七年六月十一日にかけて、英訳が付されていたことである。この英訳も毎日必ず付けられていた訳ではなく、合わせて七十八日分に相当する。その内容には共通するものがなく、何か高尚な目的があつて訳されたとは考えにくい。やはり、英訳も第一面の余白を埋めるために用いられ、△紙面の埋め草▽としての役割を果たしたと考えられる。

#### 四

大正期に活躍する文学者の小品集で有名なものに、大正四年から『大阪毎日新聞』に掲載されたコラムを集めた薄田泣菫の『茶話』と、大正十二年一月の創刊号から、『文芸春秋』の巻頭に掲げられた、芥川龍之介の「侏儒の言葉」がある。

「茶話」は、周知の通り、古今東西の逸話をもとにした、人物論にその面白さがある。「侏儒の言葉」は、芥川の人生観、芸術観などが書かれた、徹底したアフォリズムとして有名である。

それに対し、上司小剣の「その日く」は、△紙面の埋め草▽として執筆せねばならなかったからであろうか、随

想雑感コラムといった、日常生活から広く素材を求めた小品になっている。

したがって、上司小剣の随想雑感コラムの内容は、種々多様である。その時々でタイムリーな話題もあれば、明治三十六年二月二十日の「その日く」に発表された、尾上菊五郎の大阪出勤の秘話などは、執筆より十年も前の、明治二十五年三月の出来事について書かれているのである。

上司小剣の体験談だけでなく、明治三十七年二月九日の「その日く」には、次のようにある。

一兵卒曰く、『兵隊へ行くと、練兵の外に、飯炊きから、拭き掃除まで教はる、家へ帰つても女房ハ要らない。』  
といった、他人からの伝聞を紹介しているものも少なくない。

また、社会や世間だけでなく、女性の服装や都市の美観などの、風俗や美術についても言及されている。

更に、上司小剣は文明の利器には敏感に反応していたらしく、活動写真や蓄音機もその話題に上っているのである。  
明治三十六年五月二十一日の「その日く」には、次のようにある。

墨を磨つて、それを筆に染ませて書くといふのハ、些細な手数ながら、人の一代に積れば、随分多くの時間を空費して居る勘定になるであらう。それよりも墨を水に溶かしたのを瓶に入れて売つたら、時間の儉約ハもとより、硯を買う必要がなくなると思ふ。

文明を先取りしたかのような、上司小剣の先見の明が窺える。

その中に、薄田泣菫の「茶話」のような、古今東西の有名人に取材した、逸話コラムも含まれていた。泣菫の「茶話」と小剣の「その日く」を比較してみると、小剣のコラムの個性がはつきりしてくる。

例えば、同じ人物についても、対象に向けられた泣菫の視線と小剣のそれとは、全く異質である。  
泣菫がトルストイについて書くと、次のようになる。

性欲

上司小剣 作家以前の小品「その日く」

トルストイ伯は、息子のイリヤが十八歳の頃、ある日屏風の裏表で背中合せになつて、

「イリヤ、こゝでは誰も聞いては居ないし、私達もお互に顔が見えないから、恥かしい事は無い。お前は今日まで女と関係した事があるかい。」

と訊いた。

息子のイリヤが、

「否、そんな事はありません。」

と答へると、トルストイは急に歎歎をし出した。そして子供のやうにおい／＼声を立てて泣き出すので、息子のイリヤも屏風の裏でしく／＼泣き入つたといふ事だ。

トルストイは私に相談して泣いた訳でも無かつたから、何故息子の返事を聞いて泣き出したか解る筈もないが、察する所、自分が若い頃の不品行に比べて、息子の純潔なのについ知らず感激させられたものらしい。△後略▽  
泣董の場合は、息子の女性関係についてのトルストイと息子との対話の中に、「トルストイは私に相談して泣いた訳でも無かつたから、何故息子の返事を聞いて泣き出したか解る筈もないが、察する所、自分が若い頃の不品行に比べて、息子の純潔なのについ知らず感激させられたものらしい」という皮肉を付け加えるのである。

一方、同じトルストイでも上司小剣によると、明治三十七年九月三日の「その日く」には、次のように書かれている。

トルストイ翁の子息ハ、義勇兵となつて西比利亜に居る。流石ハトルストイ翁だ、人の思想の尊重することを知つて居る。自分の兒だからとて、無理に、抑圧的に、自分の信仰の圈内に引き入れやうとハしない。

泣董の言葉を借りれば「茶話」は、「お茶を飲みながら世間話をするやうな気持で、また画家がカリカチュールを描くやうな気持で」書かれたものである。したがって、名のある人物を題材にしたコラムには、どこか人を小馬鹿にしたよ

うな、風刺や皮肉が内在している。それに対し、「その日く」は、全体的に見ても、真摯な態度で、著名人だけでなく広く人間一般を観察しているのである。トルストイならトルストイの美談について素直な感想が述べられ、そこには上司小剣の良識家としての姿勢が見られる。

泣菫の『茶話』は、紙面に「茶話」欄を設定して執筆されたものであるから、一篇一篇の量が四百字詰め原稿用紙で約二三枚と大方一定している。一方、上司小剣の「その日く」は、先にも触れたように、△紙面の埋め草▽として執筆されていた。一つの記事やエッセイを載せるような分量があれば、当然、それらが優先的に掲載されたであろう。しかし、それらの原稿を載せるだけの字数がなく、小さな空白が生じた場合、または、掲載する記事が不足した場合、その空白を埋めるのが△埋め草▽である。

したがって、中には、わずか一行ほどのものもあった。

しかし、わずか一行でも、明治三十七年三月十七日の「その日く」にある、

征韓。征清。征露。戦争が段々出世した。

のように、幾度もの戦争による社会の流れを的確に表現したものがある。

また、明治三十七年六月七日と三十八年六月八日の「その日く」には、次のような一文が掲載された。

名が美しく、実のイヤなものハ、梅雨だ。

「梅雨」という一つ言葉と、梅雨そのものの落差を、たった一文で言い当てている。余計な説明は一切省かれ、要点のみが最も効果的な方法で書かれた一篇である。

上司小剣自身は、「その日く」の短文について、単行本の「序」で、「予は無韻の詩を作るつもりで、このきれくくの文章を書いたのである」と述べている。例えば、明治三十八年の二月十日に掲載された「その日く」には、次のようにある。

瘦せた土地を眺めつゝ、この瘦せた土地から、今に真珠のやうな米粒を収穫て見せる、といふて居る百姓の心ほど、世に清く貴いものハあるまい。

おそらく上司小剣が出会つたであろう日常のささやかな一場面を率直に表現し、簡勁な文章によつて、一つの世界を作り上げてゐる。たつた一文の中に、上司小剣の感性と表現力の豊かさがかいま見える。まさに、上司小剣の「小品の才」が感じられるであらう。

「小品の才」といえば、先にあげておいた芥川龍之介の「侏儒の言葉」が有名である。

芥川の小品は、上司小剣の「その日く」や泣菫の「茶話」が新聞に発表されたものであつたのとは異なり、雑誌『文芸春秋』に掲載されたものである。一篇一篇は、多いものでは四百字詰め原稿用紙約三枚分、少ないものではわずか一行と一定していないが、毎回、巻頭の一〜二頁を使って、その枠内で自由に執筆してゐた。要するに、一つの問題の下に長文を掲載していることもあれば、いくつかの問題をあげながら短文を羅列していることもある。したがつて、△紙面の埋め草▽であつた「その日く」とは、その性格が異なる。

しかし、一篇一篇に注目すると「侏儒の言葉」の、

#### 忍従

忍従はロマンティックな卑屈である。

などは、内容の差こそあれ、先にあげた小剣の「名が美しく、実のイヤなものハ、梅雨だ」に共通する「小品の才」を感じる。しかし、この二者はたつた一文でも、その表現方法が異なつてゐた。

「侏儒の言葉」には、

#### 小説家

最もよい小説家は「世故に通じた詩人」である。

という一文がある。そして、「その日く」においても、詩人と小説家について書かれたものがあつた。明治三十八年六月四日の「その日く」は、次のようである。

詩人が小説家になる。仮令へば、義太夫語りが芸妓になるやうなもの。

芥川の観念的な言葉の上での定義に比べ、上司小剣の方は、「義太夫語り」や「芸妓」など、俗っぽい比喩を用い、なるべくわかりやすいように表現しているのである。そこには、発表の場が『文芸春秋』と『読売新聞』という違いがあるであろう。「その日く」は、『文芸春秋』に発表された芥川の小品のように一部の文学者や知識人だけではなく、広く新聞読者一般に受け入れられるようなわかりやすい内容でなくてはならなかつたのであろう。

それゆえ、芥川と上司小剣とは、それぞれの小品における執筆態度が異なつてくるのである。

「侏儒の言葉」に見られる芥川の執筆態度は、社会、世間や常識、芸術、そして自分自身に対する懐疑的な眼差しでもあつた。「侏儒の言葉」は、その懐疑的眼差しを嘲笑や憎悪という形で表現した、まさに齒に衣着せぬアフォーリズムだつたのである。

一方、上司小剣は、物事の是非について自分の結論を明言しない場合が多いのである。明治三十八年九月二日の「その日く」には、次のようにある。

学者が或る学説を説明する為めに、実地の例を引いた時にハ、必ず『多少の例外ハあるが』といふ断はり書きがついて居る。

右のように、上司小剣には、物事の是非をはっきり書かず、判断を読者にまかせ、自己の主張は極力表面下に押し隠そうとする様子が窺える。

しかし、「その日く」には、執筆当時の上司小剣の思想的立場が表れている。

「その日く」が『読売新聞』に掲載された、明治三十六年から三十八年は、ちょうど日露戦争の開戦から終結にあ

たる。上司小剣の大阪時代からの親友であった堺利彦は、明治三十六年十月九日に、『萬朝報』が開戦論に転じたことがきっかけで、『萬朝報』を退社している。その後、堺は社会主義の立場から、非戦論を唱えた。一方、上司小剣は『説新聞』で編集の仕事に携わり、「その日く」を執筆していた。堺利彦や幸徳秋水と交わって、社会主義に関心を持つていた上司小剣ではあるが、明治三十七年三月二十二日の「その日く」を読むと、絶対に戦争を何でもかんでも反対だという立場でもなかったのではないか。それには、「場合によつては人間を殺さねばならぬ」と、次のように書いている。

人間と人間との戦争が、如何なる場合にも罪悪で、人間と虱、或ハ人間と黴菌との戦争ハ如何なる場合にも罪悪でないといふのは、唯物物の大小より外ハ見えぬ人の浅墓な説である。人間の爪にか、つて捻り殺された虱や、人間の拵へた恐ろしい薬液を人間の為に頭から浴びせられて悲惨なる最後を遂げた黴菌などハ、無人間を恨らんで居るであらう。虱や黴菌の機関新聞ハ、人間を不倶戴天の仇として、連日人間攻撃の記事を掲げて居るであらう。併し人間ハ己れの安全の為に、虱を殺さねばならず、黴菌を殺さねばならず、場合によつては人間を殺さねばならぬ。

非戦論を主張していた堺や幸徳のような当時の社会主義者たちとは異なり、上司小剣は頭ごなしに戦争を否定せず、人間は虱や黴菌を殺すように「己れの安全の為に」人間を殺さねばならぬ、だから、戦争も仕方がないというのである。

同じように、明治三十七年九月二日の「その日く」には、次のようにある。

日本の軍使が旅順へ降参を勧めに行つて、敵の参謀長に面会を求め、それを待つ間に、敵の前哨中隊長と、月下にウキスキーを飲みながら、戦物語をした。軍使が「貴軍の猛烈なる砲撃も、毎日耳に慣れてハさながら音楽を聴くやうだ」と言ひ、中隊長が『旅順にハ近頃芝居も無く、舞踏も無く、我々ハ毎日殺風景な生活をして居る、

それに今日ハ凶らずウキスキーを御馳走になつて有り難い』と答へ、軍使ハ更に『武士ハ相見互ひです、他日貴官が我等を要塞に囲まるゝことあらば、今日の返礼として三鞭の御馳走を頼む』と言つたのハ、近頃優しい物語でハないか、戦争を蛇蝎のやうに忌み嫌ふ非戦論者よ、戦争にハこんな美しい景色がある。

「戦争を蛇蝎のやうに忌み嫌ふ非戦論者」に向けて、戦線における美談を紹介し、戦争を擁護しているのである。この「戦争を蛇蝎のやうに忌み嫌ふ非戦論者」には、堺や幸徳を初めとする社会主義者たちも含まれていたのである。上司小剣には、物事を観念的、公式的に捉えない柔軟さがある。その柔軟さが、社会主義思想に近付きながらも直接運動に加担しなかつた、上司小剣の思想的立場でもあつたのだろう。上司小剣が、『萬朝報』が開戦論に転じたことで、『萬朝報』を退社した親友・堺利彦と一線を画する点であつたと見做すことが出来ると思う。

## 五

上司小剣の「その日く」は、人間の存在だけが問題となつていゝのではなく、人間を自然の中の一つとして考えられている。明治三十八年七月十一日の「その日く」には、次のようにある。

神様は人間の食料として、鯛を造られたと同じに、蚊の食料として、人間を造られた。

人間だけではなく、万物に向けられた小剣の温かい眼差しが、そこにある。

また、「その日く」における、上司小剣の執筆態度に特徴的なのは、明治三十八年七月八日の「その日く」に代表される態度であつた。

一夜の散歩の折、宇宙といふものハ、限りあるものか、限りのないものか、といふことを考へて、十二時ごろまで空しく立ちつくした。考て見ればつまらぬことであつた。

「その日く」全体を通読してもわかる通り、小剣は、人間の俗な日常からかけ離れた思索を、「考て見ればつまらぬ

上司小剣 作家以前の小品「その日く」

ことであつた」と述べている。だからこそ、小品の題材は日々の生活の中から拾い出してくるのである。

しかし、「その日く」には、今まで見てきたように、決して「茶話」や「侏儒の言葉」に引けをとらない小剣の独自性がある。△紙面の埋め草▽として用いられていたことはもちろんであるが、随想雑感コラムが主であつた、その内容についても十分に小剣の個性が表現されている。

今日まで一般的にはあまり知られていなかった、上司小剣の作家以前の小品「その日く」であるが、薄田泣菫、芥川龍之介の小品集に並ぶ、近代文学史における、三大小品の一つに値する、と考へてもよいのではないだろうか。

**\* 付記** 本稿は、日本近代文学会関西支部春季大会（平成十二年六月十日、於奈良大学）における口頭発表に基づくものである。



上司小剣 作家以前の小品「その日く」

新聞掲載年月	執筆者	面英訳	単行本収録	新聞掲載年月	執筆者	面英訳	単行本収録	新聞掲載年月	執筆者	面英訳	単行本収録
五月 六日	淡菴	●		六月 一日	小剣	●		七月 二日	小剣		
五月 七日	淡菴	●		六月 二日	小剣	●		七月 三日	小剣		
五月 八日	淡菴	●		六月 三日	小剣	●		七月 四日	小剣		
五月 九日	淡菴	●		六月 四日	小剣	●		七月 五日	小剣		
五月 一〇日	宝水	●		六月 五日	小剣	●		七月 六日	小剣		
五月 十一日	小剣	●		六月 六日	小剣	●		七月 七日	小剣		
五月 十二日	つるぎ	●		六月 七日	小剣	●		七月 八日	小剣		
五月 十三日	淡菴	●		六月 八日	小剣	●		七月 九日	小剣		
五月 十四日	浩堂	●		六月 九日	小剣	●		七月 一〇日	小剣		
五月 十五日	小剣	●		六月 一〇日	小剣	●		七月 十一日	小剣		
五月 一六日	淡菴	●		六月 十一日	小剣	●		七月 十二日	小剣		
五月 一七日	浩堂	●		六月 十二日	小剣	●		七月 十三日	小剣		
五月 一八日	淡菴	●		六月 十三日	小剣	●		七月 一四日	小剣		
五月 一九日	宝水	●		六月 一四日	小剣	●		七月 一五日	小剣		
五月 二〇日	小剣	●		六月 一五日	小剣	●		七月 一六日	小剣		
五月 二一日	小剣	●		六月 一六日	小剣	●		七月 一七日	小剣		
五月 二二日	小剣	●		六月 一七日	小剣	●		七月 一八日	小剣		
五月 二三日	在大坂尻馬生	●		六月 一八日	小剣	●		七月 一九日	小剣		
五月 二四日	淡菴	●		六月 一九日	小剣	●		七月 二〇日	小剣		
五月 二五日	淡菴	●		六月 二〇日	小剣	●		七月 二一日	小剣		
五月 二六日	宝水	●		六月 二一日	小剣	●		七月 二二日	小剣		
五月 二七日	松生	●		六月 二二日	小剣	●		七月 二三日	小剣		
五月 二八日	松生	●		六月 二三日	小剣	●		七月 二四日	小剣		
五月 二九日	宝水	●		六月 二四日	小剣	●		七月 二五日	小剣		
五月 三〇日	松生	●		六月 二五日	小剣	●		七月 二六日	小剣		
五月 三一日	小剣	●		六月 二六日	小剣	●		七月 二七日	小剣		
六月 一日	小剣	●		六月 二七日	小剣	●		七月 二八日	小剣		
六月 二日	S K	●		六月 二八日	小剣	●		七月 二九日	小剣		
六月 三日	小剣	●		六月 二九日	小剣	●		七月 三〇日	小剣		
六月 四日	淡菴	●		六月 三十日	小剣	●		七月 三十一日	小剣		
六月 五日	日	●		七月 一日	小剣	●		八月 一日	岳南		
六月 六日	小剣	●		七月 二日	小剣	●		八月 二日	岳南		
六月 七日	小剣	●		七月 三日	小剣	●		八月 三日	岳南		
六月 八日	松生	●		七月 四日	小剣	●		八月 四日	岳南		
				七月 五日	小剣	●		八月 五日	岳南		
				七月 六日	小剣	●		八月 六日	岳南		
				七月 七日	小剣	●		八月 七日	岳南		
				七月 八日	小剣	●		八月 八日	岳南		
				七月 九日	小剣	●		八月 九日	岳南		
				七月 一〇日	小剣	●		八月 一〇日	岳南		
				七月 一一日	小剣	●		八月 一一日	岳南		
				七月 一二日	小剣	●		八月 一二日	岳南		
				七月 一三日	小剣	●		八月 一三日	岳南		
				七月 一四日	小剣	●		八月 一四日	岳南		
				七月 一五日	小剣	●		八月 一五日	岳南		
				七月 一六日	小剣	●		八月 一六日	岳南		
				七月 一七日	小剣	●		八月 一七日	岳南		
				七月 一八日	小剣	●		八月 一八日	岳南		
				七月 一九日	小剣	●		八月 一九日	岳南		
				七月 二〇日	小剣	●		八月 二〇日	岳南		
				七月 二一日	小剣	●		八月 二一日	岳南		
				七月 二二日	小剣	●		八月 二二日	岳南		
				七月 二三日	小剣	●		八月 二三日	岳南		
				七月 二四日	小剣	●		八月 二四日	岳南		
				七月 二五日	小剣	●		八月 二五日	岳南		
				七月 二六日	小剣	●		八月 二六日	岳南		
				七月 二七日	小剣	●		八月 二七日	岳南		
				七月 二八日	小剣	●		八月 二八日	岳南		
				七月 二九日	小剣	●		八月 二九日	岳南		
				七月 三十日	小剣	●		八月 三十日	岳南		
				七月 三十一日	小剣	●		八月 三十一日	岳南		
				八月 一日	岳南			八月 一日	岳南		
				八月 二日	岳南			八月 二日	岳南		
				八月 三日	岳南			八月 三日	岳南		
				八月 四日	岳南			八月 四日	岳南		
				八月 五日	岳南			八月 五日	岳南		
				八月 六日	岳南			八月 六日	岳南		
				八月 七日	岳南			八月 七日	岳南		
				八月 八日	岳南			八月 八日	岳南		
				八月 九日	岳南			八月 九日	岳南		
				八月 一〇日	岳南			八月 一〇日	岳南		
				八月 一一日	岳南			八月 一一日	岳南		
				八月 一二日	岳南			八月 一二日	岳南		
				八月 一三日	岳南			八月 一三日	岳南		
				八月 一四日	岳南			八月 一四日	岳南		
				八月 一五日	岳南			八月 一五日	岳南		
				八月 一六日	岳南			八月 一六日	岳南		
				八月 一七日	岳南			八月 一七日	岳南		
				八月 一八日	岳南			八月 一八日	岳南		
				八月 一九日	岳南			八月 一九日	岳南		
				八月 二〇日	岳南			八月 二〇日	岳南		
				八月 二一日	岳南			八月 二一日	岳南		
				八月 二二日	岳南			八月 二二日	岳南		
				八月 二三日	岳南			八月 二三日	岳南		
				八月 二四日	岳南			八月 二四日	岳南		
				八月 二五日	岳南			八月 二五日	岳南		
				八月 二六日	岳南			八月 二六日	岳南		
				八月 二七日	岳南			八月 二七日	岳南		
				八月 二八日	岳南			八月 二八日	岳南		
				八月 二九日	岳南			八月 二九日	岳南		
				八月 三十日	岳南			八月 三十日	岳南		
				八月 三十一日	岳南			八月 三十一日	岳南		
				九月 一日	岳南			九月 一日	岳南		
				九月 二日	岳南			九月 二日	岳南		

新聞掲載年月	執筆者	面英訳	単行本収録	新聞掲載年月	執筆者	面英訳	単行本収録	新聞掲載年月	執筆者	面英訳	単行本収録
九月三日小剣	●	(四七)猿	●	二月二日骨蝶嬢	●			明治三十七年	●		
九月四日小剣				二月三日小剣				二月三日小剣	●		(三三)ハイカラ
九月五日小剣				二月四日小剣				二月四日小剣	●		(二八)婦人氣質
九月六日岳南				二月五日小剣	●			二月五日小剣	●		(三〇)俗語の力
九月七日春坂				二月六日小剣				二月六日小剣			
九月八日小剣				二月七日小剣				二月七日小剣			
九月九日小剣				二月八日小剣				二月八日小剣			
九月一日白鳥				二月九日骨蝶嬢				二月九日骨蝶嬢	●		(二九)金蔴給の重箱
九月二日白鳥				二月十日小剣				二月十日小剣			
九月三日岳南				二月十一日小剣				二月十一日小剣			
九月四日小剣				二月十二日小剣				二月十二日小剣			
九月五日小剣				二月十三日小剣				二月十三日小剣			
九月六日小剣				二月十四日小剣				二月十四日小剣			
九月七日岳南				二月十五日小剣				二月十五日小剣			
九月八日岳南				二月十六日小剣				二月十六日小剣			
九月九日小剣				二月十七日小剣				二月十七日小剣			
九月十日小剣				二月十八日小剣				二月十八日小剣			
九月十一日小剣				二月十九日小剣				二月十九日小剣			
九月十二日岳南				二月二十日小剣				二月二十日小剣			
九月十三日岳南				二月二十一日小剣				二月二十一日小剣			
九月十四日岳南				二月二十二日小剣				二月二十二日小剣			
九月十五日小剣				二月二十三日小剣				二月二十三日小剣			
九月十六日小剣				二月二十四日小剣				二月二十四日小剣			
九月十七日岳南				二月二十五日小剣				二月二十五日小剣			
九月十八日岳南				二月二十六日小剣				二月二十六日小剣			
九月十九日小剣				二月二十七日小剣				二月二十七日小剣			
九月二十日岳南				二月二十八日小剣				二月二十八日小剣			
九月二十一日岳南				二月二十九日小剣				二月二十九日小剣			
九月二十二日小剣				二月三十日小剣				二月三十日小剣			
九月二十三日小剣				三月一日小剣				三月一日小剣			
九月二十四日岳南				三月二日小剣				三月二日小剣			
九月二十五日小剣				三月三日小剣				三月三日小剣			
九月二十六日岳南				三月四日小剣				三月四日小剣			
九月二十七日岳南				三月五日小剣				三月五日小剣			
九月二十八日岳南				三月六日小剣				三月六日小剣			
九月二十九日小剣				三月七日小剣				三月七日小剣			
九月三十日小剣				三月八日小剣				三月八日小剣			
十月一日小剣				三月九日小剣				三月九日小剣			
十月二日岳南				三月十日小剣				三月十日小剣			
十月三日岳南				三月十一日小剣				三月十一日小剣			
十月四日岳南				三月十二日小剣				三月十二日小剣			
十月五日岳南				三月十三日小剣				三月十三日小剣			
十月六日せう				三月十四日小剣				三月十四日小剣			
十月七日小剣				三月十五日小剣				三月十五日小剣			
十月八日小剣				三月十六日小剣				三月十六日小剣			
十月九日岳南				三月十七日小剣				三月十七日小剣			

上司小剣 作家以前の小品「その日く」



新聞掲載年月	執筆者	面英訳	単行本収録	新聞掲載年月	執筆者	面英訳	単行本収録	新聞掲載年月	執筆者	面英訳	単行本収録
六月 三日小剣				七月 一三日小剣				八月 二六日小剣			
六月 四日小剣				七月 一四日小剣			(一八七)お布施	八月 二八日小剣			
六月 五日小剣			(一九八)家康	七月 一五日小剣			(二〇八)晩飯のさしみ	八月 二九日小剣			(一九五)空論
六月 七日小剣			(三三二)梅雨	七月 一六日小剣			(一七〇)零番	八月 二九日菱生			
六月 八日小剣				七月 一七日小剣			(一八)赤い提灯	八月 三〇日小剣			(六七)芸術家の奮戦
六月 九日格堂				七月 一八日孤瓢				九月 一日小剣			
六月 一日孤瓢				七月 一九日小剣				九月 二日小剣			(一六九)士官
六月 五日孤瓢			(九四)西洋婦人の奴奉	七月 二〇日小剣				九月 三日小剣			(六八)トルストキ翁の子
六月 六日小剣				七月 二一日小剣				九月 四日小剣			(一〇五)孔雀の尾の獲
六月 七日小剣			(二七九)地球	七月 二二日小剣			(二七七)火	九月 六日小剣			
六月 八日小剣				七月 二三日小剣			(一六二)日傘	九月 八日小剣			(一八一)もり蕎麦
六月 九日小剣				七月 二四日小剣				九月 九日小剣			(一七一)役人
六月 二〇日孤瓢			(一九七)豊太閤	七月 二五日小剣				九月 一〇日小剣			(一七)露骨の趣味
六月 二二日小剣				七月 二六日小剣				九月 一日小剣			
六月 二三日小剣				七月 二八日小剣			(二七三)寄席	九月 四日小剣			(二四四)美食
六月 二四日小剣			(一九三)征伐	七月 二九日小剣			(二二二)悪罵	九月 八日小剣			(二四三)鉢巻
六月 二五日格堂				七月 三〇日小剣				九月 一〇日小剣			
六月 二六日小剣				八月 一日孤瓢				九月 二日春坂			
六月 二七日孤瓢			(二〇六)蟬	八月 四日小剣			(一八〇)団扇と扇と	九月 三日小剣			(二四〇)秋の登山
六月 二八日小剣			(一九〇)蚊	八月 六日小剣			(一七八)立ん坊	九月 四日浩堂			
六月 二九日小剣				八月 七日小剣				九月 五日小剣			
六月 三〇日格堂			(九六)京都の女と東京の女と	八月 九日小剣			(二一六)リボン	九月 七日小剣			(二四一)美人
七月 一日小剣			(一八六)モスリン友染	八月 一〇日小剣				九月 二八日大			(三三八)写真と絵画と
七月 二日小剣				八月 一一日小剣				九月 九日小剣			(三三九)同一の軌道
七月 三日小剣				八月 一二日小剣				〇月 七日小剣			(二四二)長い行列
七月 四日孤瓢			(一八五)円いもの	八月 一四日小剣			(二二二)大将	〇月 八日小剣			(二四三)西太后
七月 五日小剣				八月 一五日小剣			(二二七)金の力	〇月 九日小剣			(三三六)海老茶の袴
七月 六日小剣				八月 一七日小剣			(二二二)俳優の死	〇月 一〇日孤瓢			
七月 七日小剣				八月 一八日小剣			(二二七)二年兵役	〇月 一二日小剣			(三三七)海老茶の袴
七月 八日小剣			(二七五)赤のかすり	八月 一九日小剣			(二二二)軍艦内の美少年	〇月 一三日小剣			
七月 九日小剣				八月 二〇日小剣				〇月 一四日小剣			(三三三)電話
七月 一〇日孤瓢			(二〇六)産婆	八月 二二日小剣				〇月 一五日小剣			(三三五)松茸
七月 二日小剣				八月 二五日小剣			(二二四)鶏				
七月 二日小剣			(一八八)軍旗								

上 司 小 剣 作 家 以 前 の 小 品 「 そ の 日 」





